

シンボジウム／口承文芸研究と女性―研究史に根ざして

『ペンタメローネ』の女性たち

杉山 洋子

一七世紀ナポリの昔話集『ペンタメローネ』を読んだひとは、女性たちの強さにびっくりするようだ。齒に衣着せぬ老婆たちにあされたりひるんだりする読者もいるが、「すかつとした」とか「ほんとはこっそりお手本にしたい」と感想をのべたひともいる。

元来昔話の女たちは不遇を耐え忍ぶ芯の強さや、押さえ難い好奇心も持っているけれど、概して受身なのではないか。グリムの「野ばら姫」や「白雪姫」、ペローの「青髭」や忍耐と貞節の見本のような「グリゼリディズ」。おそろくもつとも古く広く語り継がれてきた「シンデレラ」は、バジレの『ペンタメローネ』（一六三四―三六）、『ペロー童話集』（一六九五―九七）、『グリム童話集』（一八二二―五七）に、それぞれ「灰かぶり猫」「サンドリヨンまたは小さなガラスの靴」「灰かぶり」として収められている。灰まみれの主人公は実は美女、落とした靴が身分証明となつて、王子と結婚するというのは三話共通だが、性格はまるで異なる。ガラスの靴が売りのペローのサン

ドリオンは心優しく泣き虫、グリムの灰かぶりには辛抱強くかしく苦境を抜け出そうと算段する知恵がある。バジレの老婆が語るのは、なんと、継子の継母殺しで始まる物語なのである。

ナポリの灰かぶりは、継母があんまりいじめめるものだから、大好きな家庭教師の先生と共謀して、衣装箱の服をとり出そうとしている継母の首に箱の蓋を落として殺す。先生は父と結婚して継母になり、継子いじめを始める。このあと物語はおなじみの筋をたどるが、ペロー、グリムに比べるとことごとくにエネルギッシュで荒っぽい。継母の連れ子はなんと六人姉妹。舞踏会の後で灰かぶりを捕まえそこねた召使に腹をたてた王子は烈火のごとく怒って「お前のひげの数だけ尻を蹴ってやるからそう思え」などとわめく。この物語のかなめである靴は小さくてかわいいガラスでも金でもなく、日本の花魁が履く木履のように三〇センチも背を高く見せるピアンネラというものだが、これはなんと魔力を持つていて「前に置かれたとたん、まるで鉄が磁石に吸いつくように」持ち主の足に飛びついた、という。継母殺しといい、足に飛びつく靴といい、なんとという奔放な想像力！

『ペンタメローネ』五一話のなかの白眉は、全体の枠となる冒頭の「笑わない王女」ゾーザの物語であろう。生まれてこの方一度も笑ったことのない王女（類話はグリムの「金のガチョウ」、ロシアの「笑わぬ王女」、イギリスの「ぐうたらジャック

ク〕は父王の悩みの種。むつつり王女は結婚もできず、したがって王家に不可欠の世継ぎ誕生の望みもないからだ。ある日、王宮前広場に仕掛けた油の噴水で貧しい老婆が滑って転んで、笑いのものにされ、怒り狂ってスカートをまくり高く掲げて（怒りと脅しの呪詛的な表現だという）、悪態の限りをわめき散らした。それを見た王女は大笑いして（タブーの開放で緊張が解けて）、自分の意思を持った自由な女性に変身する。老婆から聞きだした伝説の眠る王子を目覚めさせるために、父の金庫から金貨をひと握り持ち出して旅に出る。王子を目覚めさせるためには墓所に備えてある壺を二日で涙いっぱいにしなくてはならないが、あとひと泣きで満杯というところで疲れてうとうとして、奴隷女のルチアに壺を横取りされてしまう（偽の花嫁のモチーフ、類話はグリムの「ガチョウ番の女」など）。不運にめげず、王女は七年も旅をして（旅は成人の儀式の比喩）、妖精の助けを借り、不当にも奪われた恋人を取り戻す。その戦略は、妖精に貰った魔法の糸繰り人形（古来糸紡ぎは物語することの比喩）を使って、すでに妊娠している黒い妃が「昔話をききたくてたまらなくなる」ように魔法をかけること。こうしてかつての眠り王子、今やナポリ大公の宮殿で、五日間の物語遊びが催されることになった。ナポリきっての昔話語りの名手、一〇人の老婆が選ばれる。これが『ペンタメローネ』ならではの枠の物語である。枠の構造は『アラビアンナイト』や『デカメロン』でおなじみだが、枠も枠のなかもすべてが昔話で構成

されているのは、このナポリの物語だけだろう。

そこで枠の構造とその機能について簡単に述べておく。それぞれの昔話の冒頭に荒筋、そして注目すべきは、聴き終わった昔話についての聴き手たちの感想が、短くはあるが記されていることだ。話は教訓で始まって、教訓で終わる。この物語遊びは毎朝早く宮廷の庭園に集まり、皆で歌ったり踊ったり、ゲームをしたりして遊び、昼のごちそうを堪能したあと、昔話を一〇話聞く。それが終わると、家臣ふたりが演じる寸劇で、社会や宮廷の腐敗、人間性の悪についてひとくさり、お開きとなる。五日目の最後、五〇番目の物語の語り手はいつもの語り手が風邪をひいたので、「始めの話」のゾーザが「作り話」ではなく「自分の身に起きたほんとうのこと」を語って、枠が完結する。

物語というものは、聴き手を楽しませながら正しい道を教える教訓でもある（シェラザードが語る千一夜の物語を聴いたシャハリヤール王が善王に変身したように）。花婿泥棒のルチアは、老婆たちに次つぎと偽の花嫁や花婿泥棒の類話を聴かされて、罪を暴かれ、追いつめられて、死刑になる。日本のある地方に、安産を念じて妊婦に昔話を聴かせる習慣があるそうだが、ここでは偽の世継ぎを身ごもっている偽の妃の罪を追求し納得させる、という役目を果たしていると思われる。とすれば、語り手の一〇人の老婆たちの役割は重く、彼女たちは聴き手を楽しませるだけでなく教え諭す教師であり、判決を下す裁判官

なのだ。悪は断罪され、笑い、愛し、泣くことを知った王女と、眠りから覚めて真実に開眼した王子の結婚というおなじみのハッピーエンド、という洒落た結末で、梓が閉じられる。

『ペンタメローネ』の立役者は、昔話の語り手として選ばれたナポリきつての頭の回転が早く、口達者な老婆たち。その風体は「びっこのゼーザ、腰の曲がったチエッカ、出目のメネカ、大鼻のトツラ、せむしのポーバ、よだれたらしのアントネツラ、しめつ面のチュツラ、かすみ目のパオラ、かさぶただらけのチヨンメテツラ、汚いやコーヴァ」という、まさに差別用語のオンパレード。悪口雑言があたりまえだった一七世紀ヨーロッパではまかり通っても、このような本音は、今日ではまさにタブー、許されざる言葉ではある。

一〇人の異形の老婆たちが語る昔話に出てくる老婆も負けず劣らず醜い。「三つのシトロン」（五日目九話）の老婆は全身皺だらけ、もの凄く恐い顔、ハリネズミの背中のような毛むくじやら。「生皮をはがれた老婆」（一日目一〇話）というおぞましいタイトルの昔話では「不運という不運を足し合わせてしょいこんだような化けものの見本で、まことに記録破りの醜悪な」姉妹の婆、髪はざんばら、額はしわだらけのでこぼこおでこ、せむしで腕は萎え、腿はたるみ、足はひんまがっている、と際限もなく続くのに、耳も目も蔽いたくなくなりながらも、読者は笑ってしまう、のではないだろうか。現にこのとんでもなく醜い姉婆がイチジクの木にぶら下がっているのを、七人の「も

のを言ったことも笑ったこともない」うつ病の妖精たちがみつめて、突然おかしくてたまらなくなって大笑いして喋りだし、そのお札に婆を美女に変えてくれた、という話である。美女に変身して王妃となった姉を羨んだ妹は羨望のあまり、一皮むいてもらって自分もきれいになりたくて、床屋に駆け込み、五〇ダカットあげるから「頭のとっぺんからつま先までひと皮ひんむいておくれ」と頼む。姉を羨んだ妹は非業の死を遂げる。この昔話の教訓は「自業自得」というものなのだが、玉の輿に乗った姉婆だけが幸運に恵まれたというのは不公平で理不尽なように思える。しかし、教訓は教訓としてさておき、これは語り手の醜い老婆の切なる美女願望のあらわれで、昔話ならではの恵みなのだろう。

昔話を語る老婆たちの醜さ、賢さ、魔力とは何なのだろうか。哲学者ミシュレによれば、魔女とは、かつて薬草に詳しく、主に女性を治療する医者として、また産婆として医療に従事した科学者、賢い女であった。それが中世になると大学出の男性の医者が増加につれて、賢い女性は仕事を失い、村はずれなど社会の周縁に住んでほそほと薬草、生活のためにときには毒草を扱うようになり、世間のはずれ者、年老いた悪い魔女と敬遠されるようになったという。

作家で昔話研究家のマリナー・ウォーナーによれば、異形は魔女性を表している。ペロー童話集の表紙を飾り、伝承わらべ歌の別名であるマザーグース（鶯鳥おばさん）の水かき足。お

なじような異形の足をもつ女は古い絵画や模様によく描かれている。旧約聖書の古代の巫女、ソロモン王もたじたじするほどの学者だったといわれるシバの女王も、水かき足に描かれている。水かきは、自然の秘密に通じた生きもの特有の超人間的な知恵を表すのではないだろうか。『ペンタメローネ』の語り手たちの異形も賢い女の証しであるように思える。社会の周縁的な存在である異形の老女たちは、現状の不正を正すことなど到底できはしない。しかしまさにそれゆえに、斜に構えて世界を観察し、物語りすることで間接的に世の中を批判する。「舌は骨なしでも背骨を折ることができる」と、語り手のひとりがいみじくもいうように、言葉の力は絶大なのだ（と信じたい）。

語り手の老婆たちだけでなく、語られた昔話のなかの老婆も魔力、というか知恵を持っている。「三つの王冠」（四日目六話）では、主人公があわや死刑というときに親切な老婆を呼んで助けてもらう。「鳩」（二日目七話）では、貧しい老婆が豆の鍋を割った王子を呪うと、その「呪いにたちまち翼がはえて天に届いた」。老婆の呪いの筆頭はなんと「そもそものはじめの話」の老婆の魔力である。王女に笑われて怒り狂い、仕返しに魔法にかけられて眠る王子のことを話すが、これはじつは呪いではなくて王女を愛に目覚めさせることになったのだから。老婆の言葉には魔力がある。

言葉の魔力を結集して老婆たちは「偽の花嫁」の類話を次つぎと語り、婿泥棒の偽の妃を追いつめてゆく。そのひとつ、五

日目第三話の「ピント・スマルト」は、盗まれた夫をとりかえた女性の痛快な話。ベッタは父の切なる望みに反して結婚を拒む。ある日父親に頼んで買った砂糖とアーモンドの粉を練り、金糸の髪、サファイアの目、真珠の歯、ルビーの唇の美しい若者の像を作り、ピグマリオンよろしく愛の神に祈って生命を吹き込み、ピント・スマルトと名づける。ところが結婚式のあと、世間知らずの夫はどこかの女王に盗まれてしまう。ベッタは夫を取り戻す旅に出て、親切な老婆に教わった三つの呪文で出した三つの魔法の宝物と引き換えに女王の寝室に寝かせてもらい、三晩目に見事夫を取り返した、というおなじみの昔話で、枠のゾーザの話とよく似ている。違うのは、ピントはだんだん賢くなって、自分の判断で眠りから覚めただけでなく「これまでの苦しみの代償として、筆筒のなかのきれいな服や宝石類もすべていただいて」、ベッタと手をとって女王の宮殿から逃げ出した。眠りから覚めて日々賢くなったピント・スマルト。これは偽の花嫁ルチアの欺瞞を見破られずにいた「眠り王子」へのあてつけ以外のなものでもない。その王子も五日間の昔話によって徐々に教育され、ついに真実に開眼して、遅まきながら本物の花嫁と結ばれるのである。

「ピント・スマルト」の話をじっくり聴いた老婆たちの感想は「自分の好みに合わせて夫や妻を作ることができるなら、指を一本犠牲にしてもかまわない、と思ったものはひとりやふたりではなかった」というもの。なるほど、ベッタは自分の好み

に合わせて夫、ピント・スマルトを作った。神がアダムを創ったように。そして、一番おしまいのお話「三つのシトロン」で、妻を求めて旅するのは王子のほうで、男女の役割が枠のゾーザの話やこれまでの多くの話と逆になっている。そういうえば、眠り姫ならぬ眠り王子というジェンダーの逆転も、『ペンタメローネ』ならではの創意だったのだ、とここに来て思い当たるのである。これこそ作者にして語り手であるバジールの見事な粋な計らいというものであろう。

『ペンタメローネ』は言いたい放題のおしゃべりと笑いでいっぱいのお話集で、特に元氣な老婆たちが大活躍する。昔話の語り手は伝統的に老婆さん、とだいたい決まっていた、ペローの昔話はマザーグースが宮廷風に語り、グリム童話はドイツの老婆さん、と思われていたが実はフランス系の若く教養のある女性が家庭と子ども向きに語ったというのが、真相であった。とにかく昔話の語り手は、酸いも甘いも噛み分けた老婆さんがふさわしいような思いこみがある。そして昔話集ができあがるまでには、老婆さんたちが語る昔話を収集し、手直しし、文字化し、編集した作家がいて、そういう作家とはペロー、グリム、バジールなどの男性だった。マダム・ボームンやマダム・オルノワなど女性の作家もいたけれど、元来子どもたちにお話を語るのは女性、それを文字化し編集するのは男性、という通念、というか、慣わしのようなのがあったと思う。

『ペンタメローネ』の枠を閉じるのは「作者なるこの語り手」

の役目で、バジール自身と考えてよい。老婆たちが記憶のなかからとり出し、技巧を尽くして語った昔話を文字化し、編集し終えた作者は「蜂蜜をスプーンいっぱい頂戴して、そうっと席をはずしたのであります」と、締めくくりに昔ながらの決まり文句を告げて、ページを閉じる。

それにしても、バジールは女性の視点をよく活かした作家であった。そういうえば、わが『古事記』のすべてを語っていたと伝えられる稗田阿礼は男性でなく、ほんとうは女性だったという新説があるのを最近知った。『古事記』には女性ならではの視点が、ここかしこに見られるのだそうだ。

参考文献

ジャンパティスタ・バジール『ペンタメローネ・五日物語』上

下 杉山洋子・三宅忠明訳 二〇〇五 ちくま文庫

ジュール・ミシュレ『魔女』上下 篠田浩一郎訳 一九七四

現代思潮社

Marina Warner, *From the Beast to the Blonde: On Fairy Tales and Their Tellers*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1995.

(すぎやま・ようこ／関西学院大学名誉教授)